大法輪

特集‖これだけは押さえておきたい 仏教の基本

【仏教を知るためのポイント】「お釈迦さま」5つのポイント／「基本の教え」5つのポイント／「お経」3つのポイント／「仏教美術鑑賞」6つのポイント他【日本仏教を知るためのポイント】「日本仏教史」8つのポイント／「日本仏教十三宗」ガイド／「お寺」がわかる4つのポイント／「霊場めぐり」4つのポイント／日本仏教名僧ガイド他

宮沢賢治の「春と修羅」と法華経｜渡辺宝陽／宮中の「永平寺料理」｜秋山徳蔵

白象来迎図、及び奏楽童子図　間瀬静江

3

大法輪

平成27年 3

大法輪

平成27年 3

「露柱が児を生む」という話があるけど、
何んでもかんでも他人じゃないんだ。
自己とぶっ続きの生命なんだ。
ここにある魔法瓶、
これは他人じゃないんだ。
自己とぶっ続いている。
だから魔法瓶がお茶碗を生んだ
といっても不思議ではない。
すべて同時に存在する限りは
お互いに助け合って生きてんだからね。
俺だけの俺というものはない、
魔法瓶だけの魔法瓶もない。
お茶碗や俺に対してある。
いやぶっ続きなんだ。

——内山興正

『改訂版 いのちの働き—知事清規を味わう』より

目次

平成27年3月号

表紙「白象来迎図、及び奏楽童子図」（日展）……間瀬静江
扉絵……小泉元生
目次絵……吉崎道治
カラー口絵　信州「塩田平」の名刹　龍王山 中禅寺を訪ねて…写真・文／棚澤幸夫　5
〈巻頭〉光明中……本山蓮華寺貫主　井澤隆徳　13
新・にっぽん聖地巡拝の旅〈六〉東日本大震災 被災地の神と仏…玉岡かおる　14
漱石・明暗を行く―胃病死の謎を解く（八）……山崎光夫　22
慈悲のかたち―仏教ボランティアを通して（14）……大菅俊幸　30
老子随想〈七〉……蜂屋邦夫　36
随筆説法　いのち輝かす仏教（22）……篠原鋭一　42
リレーコラム　仏教の眼　いのちあるものへの慈しみ……衣斐弘行　56
エッセイ　私の「縁は異なもの」　お正月……太田治子　58
○借りた本は返せない……山城むつみ
鉄笛○三島由紀夫と東京オリンピック……山内由紀人　○手帳とアリバイ……山本晁重朗　60
涅槃会巡拝記〈四〉仏の里で涅槃図展―大分県豊後高田市…竹林史博　48

特集 これだけは押さえておきたい 仏教の基本

「仏教」に関する言葉や歴史的出来事、仏教美術や伽藍・儀式の様子、そして宗派など…「一般教養」としておぼえておきたい基本的なことがらを簡潔に平易に解説していきます。

第一部 仏教を知るためのポイント

「お釈迦さま」の5つのポイント〈誕生・出家・悟り・伝道・涅槃〉……藤丸智雄　66
「基本の教え」の5つのポイント〈三法印・四聖諦・縁起・空ほか〉……服部育郎　70

「お経」の3つのポイント〈お経とは何か／主なお経／日本のお経〉……佐藤達全 74
「世界の仏教」の5つのポイント……須田哲成 80
インドから諸外国への伝播／上座部仏教と大乗仏教の違い／上座部仏教の国々ほか
「仏教美術鑑賞」の6つのポイント……田島　整 85
如来像・菩薩像・明王像・天部像・曼荼羅の鑑賞の仕方ほか
新聞・テレビに登場する仏教語……義盛幸規 92

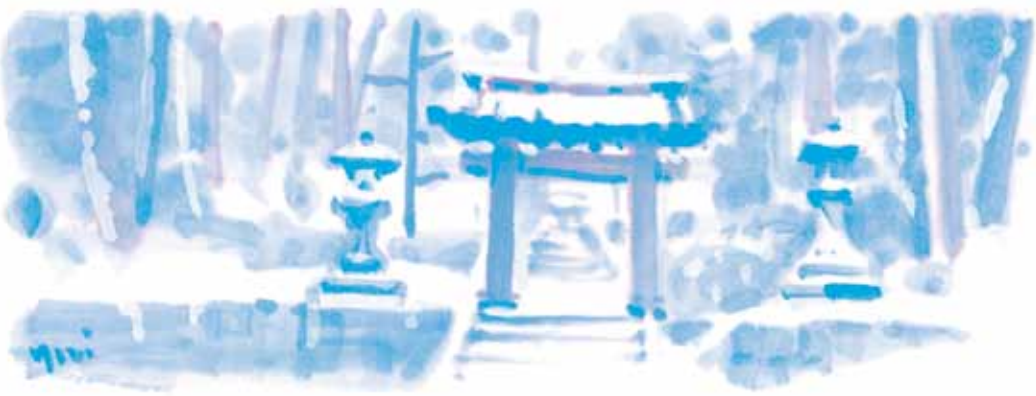
第二部　日本仏教を知るためのポイント

「日本仏教史」の8つのポイント……横山全雄 98
聖徳太子の存在／奈良・平安・鎌倉仏教／室町期・江戸の仏教ほか
「日本仏教十三宗」ガイド……村越英裕 104
「お寺」がわかる4つのポイント……足立宜了 112
参拝の仕方／主な建物／寺院庭園の鑑賞法／お坊さんの呼び方いろいろ
「主な仏教行事」ガイド……熊本英人 118
「霊場めぐり」の4つのポイント……白木利幸 122
巡礼とは何か／西国・坂東・秩父の観音霊場とは／四国八十八ヶ所とはほか
教科書に出てくる日本仏教名僧ガイド……豊嶋泰國 127
宮沢賢治の「春と修羅」と法華経……渡辺宝陽 132
天台思想入門〈6〉……新田雅章 140
道元の思想と書〈13〉……岩井孝樹 146
いま、仏教を学ぶことの意味〈40〉……菅沼　晃 154
『安心決定鈔』を読む〈21〉……佐々木隆晃 160
日蓮紀行〈54〉―日蓮が一類は―生死一大事の時……福島泰樹 166

〈コラム 仏心を問う③〉生と死……形山睡峰 174
〈最終回〉熊沢蕃山の見果てぬ夢（十）……横田　喬 176
小泉八雲の「耳なし芳一」と阿弥陀寺……志村有弘 182
「妙好人」再考（上）……塚田幸三 188
〈気まぐれ新シリーズ〉暮らしに生かす禅ライフのすすめ⑥……花岡博芳 205
本棚を持とう、電子版が盛んになっても「存在」から「いる」へ……木井昭一 208

大法輪カルチャー講座

〈新連載〉文芸にみる女人たちの菩提心①『平家物語』と祇王……三野　恵 194
京の街を歩く㉖白川と岡崎……井上満郎 200
山頭火の風景㉞波音の菜の花の花ざかり……版画と文・田主　誠 55
遍路で学ぶ生きる知恵㉛科学と宗教との共存……武田喜治 64
雑学から学ぶ仏教（56）一休禅師に学ぶ④……瓜生　中 212
仏教なんでも相談室……鈴木永城 216
ドクターらく朝の「井戸端けんこう談義」（31）強烈なライバル……立川らく朝 218
〈大法輪アーカイブス〉宮中の「永平寺料理」〈昭和34年5月号より〉……秋山徳蔵 232
「天皇の料理番」が語る、宮中に「永平寺料理」が摂り入れられるまでの由緒と精進料理修業記。
ペンまんだら……222
読者の頁　漢詩……奥田魚錢 224　短歌……篠　弘 226
俳句……小川晴子 228　川柳……尾藤三柳 230
囲碁将棋公案……工藤紀夫／武市三郎 63
教界レンズ……220
編集後記……236
カット・さしえ……伊藤礼子／悟東あすか／西谷昌久／橋本樸々



光明中

◎井澤 隆徳
本山蓮華寺員主

観無量寿経に、阿弥陀如来の一一の光明は普く十方の世界を照らして念仏の衆生を摂取して捨てたまわずとあり、阿弥陀如来により、明るさ、温かさ、人としてのお育てを頂くことが光明に照らされての生活であり、念仏申す者の生き方であります。

しかし、日常生活においてこのことを忘れて生きていると、私自身お念仏の中に改めて気づかせられている毎日であります。

大法輪

平成27年 3

特集

これだけは押さえておきたい

仏教の基本

仏教の象徴「法輪」

約2500年前のインドでお釈迦さまによって創始された仏教は、年月を経てわが国に伝えられ、葬儀をはじめ死者への供養、お彼岸や盂蘭盆会などの年中行事にみられるように日本人の生活に密接に結びつきました。

その深遠な教えや長い歴史については、古来あまたの専門家の方々による書物が出されていますが、一般の人たちにとっては難解なものが多いかと思います。

今回の特集では、ごく普通の人へ向けた「入門」として、仏教の各分野の「基本」を、分かりやすく「要点（ポイント）」を明示したうえで解説しました。

第一部

仏教を知るためのポイント

知っておきたい

「お釈迦さま」の5つのポイント

藤丸 智雄（ふじまる もとお）

浄土真宗本願寺派
総合研究所研究員

① 誕生

およそ二五〇〇年あまり前。地中海では、ソクラテスやプラトンの活躍するギリシャ文明が胎動していた頃、インドでは十六大国と称される国家が存在し、それら大国に挟まれるように幾つもの小国が存在していた。

そのうちの一つが釈迦族の国であり、釈迦族の王シュッドーダナ（浄飯王）と妃マーヤーとの間に、やがて釈迦族の王となるべき身として、シッダールタ（釈尊）が誕生する。母親のマーヤーは、釈尊を生む準備のためだったのだろう、故郷への道の途中にあるルンビニーの花園で一休みしようとした。マーヤーが、その花園にある無憂樹（アショーカ）の枝を手にしたとき、急に産気を催し、右わき腹から釈尊が誕生した。この突然の誕生が何を意味するのか不明だが、母マーヤーは一週間後に逝去する。

誕生仏（ルンビニー）

② 出家

釈迦族を率いる者として生を享（う）け

た釈尊だが、誕生後、王に招聘された占い師たちは「武力を用いず世界を統治する者か、真理の法をひらく覚者となるだろう」と予言する。また、神々の喜ぶ声を聴いて誕生後の釈尊を訪れたアシタ仙人は、その優れた姿を見て「この方は最上のお方であり、やがて悟りをひらかれるであろうが、私の命は残り少なく、その場にいることが出来ない」と嘆いた。

もちろん、王子である釈尊の出家は、宗教を社会の大切な価値とするインドであっても、必ずしも歓迎されるものではなかった。父王は、王位を継いでもらいたい息子のために、豪奢な宮殿を三つも設け、不自由のない生活を与えたが、憂い深く感受性の高い釈尊は、やがて出家への扉を開いていく。

釈尊は、城壁都市の東西南北の四つの門から出て、老人、病人、死者、そして出家修行者と出会う。この経験を通して、人間の根本的な苦悩を見出し、この苦悩を超克するための悟りをひらくことに自らの生きる道を見出す。

すでに、妻を得、ラーフラ（障り、あるいは月蝕の意味）という息子が誕生していた釈尊であったが、ある夜、意を決し、御者チャンナに準備させた馬カンタカに乗り、城外へと出て、出家修行者に仲間入りする。

当時、多くの行者が活躍していたが釈尊は、その中でもとりわけ高名な二人の師の元を訪れた。アーラーラ・カーラーマ師の元では、所有するという思いの無い境地（無所有処）とを学ぶ。瞬く間にこの境地に達した釈尊は、この境地に満足せず、師を離れる。

次に、訪れたウッダカ・ラーマプッタ師の元では、思うのでも思わないのでもないという境地（非想非非想処）を学び、この境地もわずかな時間で修得するが、これにも満足することは出来なかった。いずれの境地にも充足することのできなかった釈尊は、苦行の生活へと進む。

③ 悟り

苦行は、六年間にも及んだ。釈尊の修行の地ウルヴェーラーには、多くの苦行者が集い、厳しい修行に明け暮れていた。そこで五人の修行仲間（五比丘）も得る。釈尊は、例えば、一日にゴマを一粒食べるだけといった苛酷な修行を行った。こうし

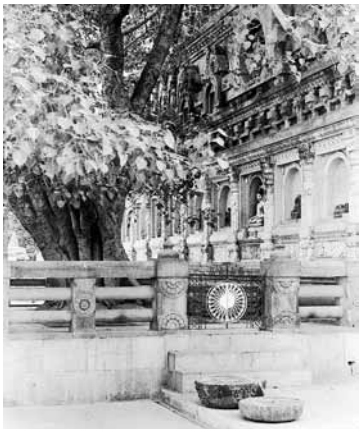
釈尊苦行像

た修行の結果、若々しく生気にあふれていた釈尊の肉体は、やせ衰え、死期さえ感じさせるほどになった。

六年間、苦行を継続したのち、釈尊は、「これも正しい悟りへの方法でない」と考え苦行を止める。釈尊は、借り物でなく、自分の求める真理を、誠実に求め続けたのである。しかし、五比丘は、釈尊が堕落したと考え、彼の元を離れバーラーナシ郊外の鹿野苑へと修行場所を移す。

一人になった釈尊は、ウルヴェーラーから程近いネーランジャラー河のほとりに行く。そこにやってきたのが、近隣の村の娘スジャーターであった。彼女は釈尊に乳粥を施した。釈尊は、悟りをひらくまで、結跏趺坐の修行に集中できるよう、乳粥を四十九個の団子にして準備した。そして、固い決意を結んだ釈尊は菩提樹を背にして座り、魔による攻撃も跳ね返し、いよいよ永遠の真理を悟る。

さて、さとりの内容については諸説あるが、現存する資料によれば「縁起」が、さとりの内容であったと言って良いだろう。釈尊の菩提樹下の悟りは「縁起」という理法、すなわち極めて理知的なものであったことが、苦行と決別したことの意味を象徴的に表している。


さとりの地・ブッダガヤ

④ 伝道

悟りをひらいた釈尊は、四十九日間、何の畏れも憂いもなく、法悦に浸った。当初、悟りについて、他の人びとに伝える思いを釈尊は持っていなかった。「悟りは、世間の人びとの流れに逆らうものであり、貪りの中にある人々は、これを理解できないだろう」と考えたのである。そ

ここに梵天が現れる。

梵天、すなわちブラフマーとは、真理を神格化したものであり、古代インドの最高神のひとりであった。梵天は、繰り返し、法を説き示すように要請し、釈尊は法を説き始めることを決意するに至る。この梵天の切なる願いによって、説法を決意したことが、仏教の始まりとなる。この後、梵天は、仏法の守護神としてあがめられるようになる。

クシナガラの涅槃像

⑤ 涅槃

釈尊は、まず鹿野苑にいた五比丘のところに行く。五比丘は、「堕落した奴が来た、無視しよう」と示し合せるが、あまりの神々しさに心打たれ、釈尊に法を請い、仏弟子となる。また、長者の息子ヤサも仏弟子となるが、ヤサは在家信者の始まりとなる。一度に多くの者が弟子になったこともあった。三人の迦葉兄弟は、火を祀り、呪術で人々を驚かせ千人もの弟子を率いていたが、釈尊の真理の力を目の当たりにし、すべての弟子とともに釈尊に帰依した。このようにして、仏教教団が形成されていった。

仏教教団がいかに大きくなろうとも、釈尊の在り方に変化は無かった。生涯、瞑想と遊行にいそしみ続けた。それは、人生の終わりにおいても変わることがなく、齢八十になった釈尊であったが、アーナンダを伴い、霊鷲山を出発する。この最後の旅と、釈尊の入滅については、『涅槃経』という経典が編まれるほどに、大切なエピソードが豊富にある。釈尊は自らの死を自覚していたようで、「自灯明 法灯明」や「師の握り拳」等といった大切な教えも、この最後の旅の中で説かれた。

釈尊は、小さな町クシナガラで最期の時を迎える。釈尊は、瞑想を繰り返し、高い境地に至ったのち、入滅された。地は大きく震動し、雷鳴が鳴り響いた。